

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「3つの疑問に答える」

1 文字指導のポイントは？

文字を本格的に学ぶのは、小学校に入学してからである。「読み方」と「書き方」に加えて、鉛筆の持ち方、よい姿勢、書き順、文字のバランス等、一度にたくさん覚えることになる。発達アンバランスだったり、ゆっくりだったりする子どもは、同時処理が苦手なので、文字指導に抵抗を示すことが多い。

成果が見て分かりやすい「書き方」に注目しがちであるが、優先すべきことは、しっかり読んでお話を理解すること、文字が生活に役立つことを実感することである。ある研究では、きれいで形の整った文字が書けることと学力との関係があまり高くないことや、学年が上がると自然と文字の形は整っていくという結果が報告されている。

書き順や文字の形にあまりこだわらず、できているところを評価する。



2 ASD（自閉スペクトラム症）の子どもは視覚優位か？

言葉はすぐ消えてしまうので、視覚情報で伝えることは、ASDの子どもに限らず、全ての子どもにとって有効な支援である。また、ワーキングメモリに弱さのある子どもにとっても、消えない視覚情報はなくてはならない支援である。

一日のスケジュールを写真カードで縦長に提示すると、情報量が多すぎて混乱する子どもがいる。体育の時間を体育館全体のイラストで提示するよりも、バスケットリングや走っているイラストを示した方が理解できる子どもがいる。何でもかんでも視覚支援をすればいいということではない。

終わった活動の視覚情報は取り除く、今何をしているか、次何をすることが分かるように提示するなど、時間や活動の流れをシンプルに分かるように伝える。

3 よいほめ方とは？

以前、ほめ方のポイントとして「行動した後にすぐほめる（60秒ルール）」、「頑張っている過程に注目してほめる（25%ルール）」、「複数の人がほめる（3回ルール）」を紹介した。

よいほめ方だったのか一番分かりやすいのは、ほめた行動（望ましい行動）がほめた後に、増えているか、定着しているかどうかにかんする。

ほめるというのは、何か変化が起きたときにする関わりであるが、何か取り立てて変化が起きていないときに、子どもと言葉のキャッチボールをすることでほめる効果がアップする。



とれたて直送便



「ダメなことをダメと伝えるためには？」

「～してはダメ（否定形）」は混乱します。「～しなさい（命令形）」はやる気をなくします。子どもに「×」を伝えるときは、「○」を伝えることがポイントです。「廊下を走るな！」ではなく「廊下を歩きます！」「忍者のように歩きます」のように、大人が期待する姿を分かる言葉で伝えましょう。子どもは、分かるように伝えてくれる大人を信頼します。